

読書女のつづき

内藤 真理子

四月のOBペンクラブ「何でも読もう会」の課題図書は、篠田節子著の『女たちのジハード』だった。題名の通り、女性たちが自分自身や世間と葛藤しながら成長していく話だ。

登場するのは二十代から三十代の保険会社のOL五人。年齢的にもこれから向かってやる気満々、今ならまだ間に合う等、それぞれのパターンで話が進む。

一九九七年の作で、小説の背景には、女性は二十五、六になったら結婚相手を見つけ、三十前に寿退社をと会社は望み、社会からの無言の圧力も見え隠れしている。私も若かったら刺激され発奮しただろうが、今回は青春小説として、ひたすら面白く読んだ。

現在の女性はどうかろう、と思っていたら読もう会メンバーのYさんが、上野千鶴子さんの【最後の講義】のビデオがあるから見に来ない？ と誘ってくれた。その講義で上野さんは

「専業主婦の家事労働に値段をつけるべきだと最初に言ったのは私です」と、にこやかに言われた。たしかに、上野さんのお陰で女性の地位が上がったと思う。

さだまさしの、関白宣言の歌詞を思い出した。
「俺より先に寝てはいけない 俺より後に起きてもいけない 飯は上手く作れ いつもきれいでいろ……」

今歌ったら、妄想のパロディと相手にしてもらえなさそうだが、この歌が世に出た一九七九年、今から四十二年前には誰もが笑って口ずさんでいた。

この歌詞の要求通りに労働の対価を払うと、この新妻に年間二百五十万円くらい払う勘定になるのだろうか。

上野さんはこの講義で「もっと戦略的に生きなさい」と言われた。

上野さんの最後の講義の男性生徒は「払えない」と言っていた。「二人で働いて……」とも。女性には子育ては値段を付けたらいいという意見もあった。

家事、育児、親の介護、諸々が女性の無償の行為、という常識から徐々に抜け出しつつある。女性の意見も聞いてもらえつつある。と言えどもまだまだ。

日本の女性の地位は、世界に比べて……それは低いでしょう！